

二〇一五年六月一日 開催

被爆二世アーティストの挑戦

——芸術平和学的思考によるコミュニケーションより

田中 勝

■講演者……田中 勝（東北芸術工科大学・文明哲学研究所）

■司 会……榎本智子（本学国際コミュニケーション学科教授、グローバル・コミュニケーション研究所 副所長）

「Art in You（あなたの中にアートがある）」とは、世界的な美術家として活躍する宮島達男が、芸術活動をする中で、導き出した答えです。作品を制作している側にだけアートが存在するのではなく、その作品を鑑賞する側にアートを感じる心があるからこそ、アートが存在する。いわゆる、すべての人々の中に、それぞれのアートが存在するという概念です。このことを頭に置いて、今日のお話しを進めたいと思います。

一九九八年にサンフランシスコで行われた国際美術展に参

加し、プレゼンテーションで、広島出身の私は、原爆について話をしようと思いました。よく幼い頃に、父や祖父父母から、私の通っていた己斐小学校の校庭には、原爆で亡くなった方の骨がたくさん埋まっていると聞いていました。ですが、それが本当の話なのか、父に電話で確認しました。今まで、父が被爆者だということは、足にケロイドの痕があったので知っていましたが、被爆体験を一度も詳しく聞くことはありませんでした。そんな父が、初めて自分自身の被爆体験を話してくれました。一九四五年八月六日の夏の朝、四歳だった父は、家の前でセミを取っていた時、閃光と爆風を浴び、手足に火傷をおって被爆しました。原爆の火は、爆心地から二・五キロメートルほどにあった家まで飛んで来たそうです。家の前の小さな川を、火傷をおった人たちが上流の方へと歩き、その先にある己斐小学校の校庭で、バタバタと死んでいったそうです。父は、被爆したことはずっと言いたくないことだっ



田中勝氏

たそうです。被爆者を白い眼でみる社会があり、「差別した眼で見られるのが嫌だった」と語っていました。父や私の母校である己斐小学校の校庭は原爆投下後、仮設の火葬場となり、二〇〇〇以上の遺体が燃やされそのまま埋められました。父は、放射線影響研究所（ABCRC）へ定期的に呼び出され、アメリカ人の研究対象となったそうです。モルモットのようだと言っていました。

そして、私がスピーチをしたサンフランシスコ展の会場に、平和を希求し、「平和の為に何かさなければならぬ」と、

平和に対する責任感を自己のアーティストの使命として活動するアメリカ人画家、ベッツィ・ミラー・キューズ（Betsey Miller-Kuzs）がいました。ベッツィは、一九四五年一月九日、あの原子爆弾研究のマンハッタンプロジェクトが行われたアメリカ・ニューメキシコ州ロスアラモスの地に生まれました。父親は、当時、原爆製造の研究生としてこのプロジェクトに携わっており、彼女が生まれて約半年後、広島、長崎に原爆が投下されました。彼女の父親は、彼女が生まれていなかったら、原爆投下機「エノラゲイ」の後方機に搭乗する予定であったといえます。ベッツィは、物心ついたときに父親の仕事を知り、とてもショックを受けたそうです。その後、芸術家として活動する中でも、ベトナム戦争で後遺症をおった人へのアートセラピーを行うなど、平和に貢献できることを願っていました。また、ベッツィの父親は、晩年、ノートルダム大学で物理学の学科長として教鞭を取りながら、学生たちに「科学は平和の為に使われなければならない」といつも語っていたそうです。

被爆者の父を持つ私と、原爆開発に携わった父を持つベッツィが、今度は力を合わせて平和をテーマに共同作品制作をはじめました。作品は、ハワイのパールハーバーで、日本軍による真珠湾攻撃によって沈んだ軍艦のアリゾナ号を撮影し

たものや、韓国・板門店のあるJSA (Joint Security Area) で韓国と北朝鮮の境を撮影したものなどがあり、一九九九年からスタートしたプロジェクトは今年一七年目で、共同制作作品は七二点となり、国内外で作品展や講演会、ワークショップを開催してきました。

一九九九年に広島で初の「平和の新世紀」プロジェクト作品展を開催しました。展覧会期間中、マスコミにも多く取り上げて頂き、あるテレビ局から取材を受ける中、被爆者である私の父にインタビューがしたいと言われました。最初は嫌がった父ですが、実際、インタビューでは、私の聞いたことのない当時の話などもしてくれていました。その翌日、ベツツイは展覧会の会場で再会した父に、「お父さん、昨日は、テレビのインタビューにこたえられたそうですね。それは、本当に勇気のいることでしたでしょう。」と話してくれました。父は、ベツツイと通訳者を展覧会場の裏に呼んで、「ベツツイさん、これは、人にあえて見せるのは、初めてだけど、よく見ておいてくれ」と、ズボンの裾をめくって、ケロイドの痕を見せたそうです。私の家族の個人的な話ですが、ある意味、五〇年間、隠し通してきたことを開放してくれたことは、父自身でしか出来ない心の変化であり、私にとって、最大の喜びでありました。



左からベツツイ・ミラー・キュウズ氏、田中一夫氏（勝氏の父）、田中勝氏

今まで行ってきたプロジェクトを振り返りながら、幾つかのエピソードをご紹介します。一九九九年に、海外で初の展覧会をサンフランシスコで開催しました。日本軍の真珠湾攻撃によって始まった太平洋戦争開戦の日に合わせて、国連発祥の地であるサンフランシスコの退役軍人施設で開催しました。展覧会では、私たちのプロジェクトに対して、アメリカ・ホワイトハウスのヒラリー・クリントン大統領夫人

人より、「勝とベッツィイの活動は、平和の為にかけがえのない機会を与えている」と、メッセージが届けられ、また、サンフランシスコからは一九九九年一月七日という日を、私たちのプロジェクトの名前から、「平和の新世紀」の日」と定める声明文を頂きました。

二〇〇〇年からは、子ども達とベッツィイと私の活動をきっかけに、母校である己斐小学校の校庭で亡くなった方々の慰霊祭も、子ども達を中心に毎年開催されるようになり、現在も続いております。二〇〇一年のソウル展では、二一世紀の始まりの年に、この韓国から平和のプロジェクトを開催したいとの強い思いがありました。一九四五年八月一日は、日本では終戦記念日ではありますが、朝鮮半島にとっては日本からの独立を祝う日であり、その後、米ソによつて、同じ民族が分断へと向かいはじめた日でもあります。二〇〇〇年は、日本と韓国の間で、歴史問題などがあり、多くの困難がありました。最終的に展覧会と、講演会のみを開催することになりました。プロジェクトのことは、韓国のメディアが多く報道してくださり、日本文化の禁止を採決した韓国国会にも届き、国会議長への表敬訪問となりました。イ・マンソプ国会議長は、「あなたたちが、平和を創造する人だから、国会に招待したのです。」と言ってくださり、約二時間半にも及んだ芸術を通して行なわれた平和の語らいは、「アジアの歴史に、

ひとすじの光をもたらした」と、報道されることとなりました。

世界には数え切れないほどの問題、課題がありますが、一芸術家の活動が、対話と共感へと拡がって参りました。カリフォルニアの中学校で講演終了後、感想と平和のメッセージを折紙に書いてもらったのですが、ある生徒が感謝の言葉と共に、「原爆を落としてごめんさい。(I'm sorry for the bomb)」と書いており、その言葉を見た担任の先生が、涙を浮かべていました。なぜなら、アメリカの歴史教育の中で、広島への原爆投下は、「日本がアジアに非道なことをしており、世界の平和の為に成したこと」と、教育されています。そのような中、過去の出来事を、他人事としてではなく、自分のこととして言えるこの生徒の気持ちに私自身が感動しました。

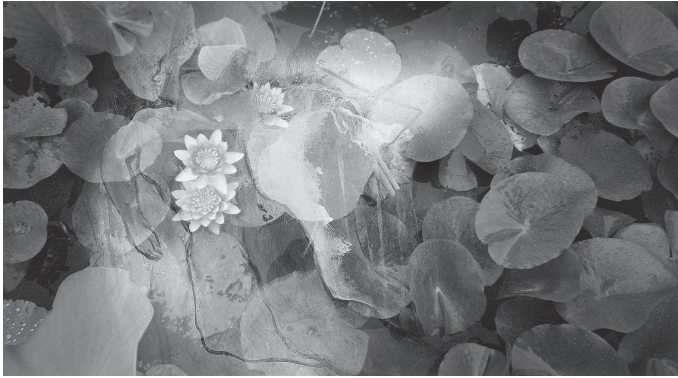
二〇〇九年八月、ニューヨーク国連本部のメインギャラリーにて開催された「核兵器廃絶展」にて、国連から声をかけて頂き、私たちの作品も展示させて頂きました。この展示では、世界最大の核実験場であった旧ソ連時代核実験の秘話が初めて公開され、カザフスタンのセミパラチンスク核実験場では、四五〇回を超える核実験が行われ、一〇〇万人以上の住民がガンや白血病、成長未熟などの健康被害に悩まされていることが訴えられました。レセプションにおいてカザフ

スタン共和国のビルガニム・アイチモワ国連大使は、「核は悲劇を生む。核を使えば、誰も勝者にはならないと知ってほしい」とスピーチしました。

二〇一三年は、八月六日のヒロシマの「原爆の日」に合わせて、原爆開発・製造が行われたロスアラモスにあるアート・センターで、地元高校生との共同展示で作品展を開催する機会に恵まれました。この町で、私たちの展覧会を開催することは無理だと多くの方に言われ続けてきました。なぜなら、現在もアメリカの国家防衛のための最も大きな軍の研究施設のひとつで、核兵器の維持管理、新兵器開発など、約一万一千人の研究所員が働いている場所だからです。人類初の原爆製造は、科学的成功として伝えられていますが、その原爆による悲劇は語られて来ませんでした。私たちと共同展示を行うにあたり、広島、長崎の被爆者の方々と共に、ベツツイと私、そして父が出演しているドキュメンタリー映画『ノーモア広島ノーモア長崎』（二〇〇七年にカナダのDOXAドキュメンタリー映画祭で最高賞を受賞）をロスアラモス高校の生徒たちは鑑賞しました。そして、高校生たちは挨拶で、次のように述べました。「このようなことが起こったことを初めて知り、衝撃を受けました。忘れてはならない出来事であり、平和を考えていかなければならないこと、そして、原爆で亡くなった方、水が飲みたくても飲めなかった方、その痛

み、悲しみに心からお祈り申し上げます。」「ドキュメンタリーを鑑賞した後、戸惑い、気持ちが悪くなりました。自分たちがやったことを恥ずかしく、嫌悪感を抱きました。」「これらのことは、決して忘れるべきではないし、これからの未来に対して後悔しないように、覚えていたいと思います。」「ロスアラモスを代表する日刊新聞で、「平和のメッセージを広げる展覧会」との見出しで紹介され、記事の中には父の被爆のことも紹介されました。ロスアラモスの歴史から考えると、被爆者に関わることが紹介され、「平和を広げる」とこの報道は驚くべきことと地元の方から言われました。

これまで私の活動を紹介してきましたが、世界には核実験・核兵器・核問題のテーマから環境や社会問題に挑んだ「平和のアーティスト作品」が数多くあります。「芸術と平和」について探求する中で、「平和のアーティスト作品」に共通点があることがみえてきました。今までご紹介した「平和の新世紀」プロジェクトを推進し、応援してきてくださった方をみても、多くの方が皆アーティストではありません。実はこれが、最初にお話しさせて頂いた「Art in You」ということなのです。芸術する心があるが故に、芸術を通して人と人が繋がり、誰もが、アートを通して、平和のメッセンジャーとしての主体者であり、主人公になり得るということです。決



「平和の新世紀」プロジェクト共同制作作品『白い雨』(Clear Rain)

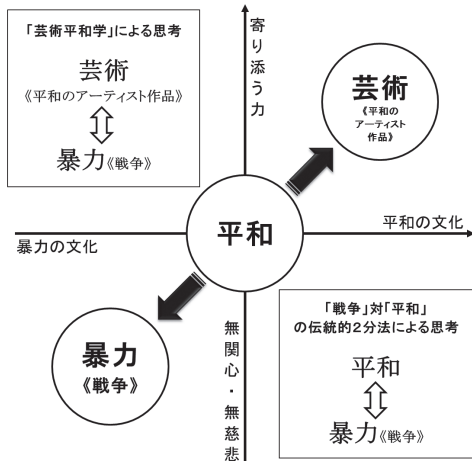


「平和の新世紀」プロジェクト共同制作作品『マザー』(Mother)

してアーティストだけの特別なものではないのです。

平和において最も大事なことは「寄り添う」存在です。別の言葉で述べるならば、「最も苦しんでいる声に耳を傾けている」ということがみえます。作品表現において「最も」とは、表現するアーティストにとつての主観的なことでありますが、表現するまでに至るアーティストの思いの部分です。そして「平和のアーティスト作品」から導き出される結論として、全ての平和のアーティスト作品とは、「人間の良心に訴えかける精神の覚醒」として作用しているということを申し上げたいと思います。『芸術平和学』が目指すべきところは、「どうせ、何をしてダメだ」という諦めの心を克服し、信頼を構築することでもありません。「無関心」と「無慈悲」の壁を打ち破り、「人間の良心に訴えかける精神の覚醒」を促す大いなる存在こそ、「芸術の力」であり、人類はそこへ弛まぬ努力を惜しんではならないと思っております。想像力と創造力、この二つのソウゾウリョクが平和をつくり出し、心を育んでいます。どんなに知識があっても、戦争や核兵器を推進し、他人の不幸の上に自分の幸福を築くようでは悪の連鎖を断ち切ることは出来ないのではないでしょうか。

一般的に、戦争の対義語として、平和があります。これらの思考は、戦争の対義語として論じられてきた平和を再定義し、平和をゼロと考え、暴力をマイナス要因と考えた場合、



「芸術平和学」的思考図

このマイナスをゼロまで持つていくには、明らかにプラスの存在が必要であり、その存在こそ、「無関心」の対極にある「寄り添う」ことから始まる「平和のアーティスト作品」であると言えます。

核兵器廃絶も、国家というあまりにも大きな課題であるが故に、自分には何も出来ない、無気力・無関心になりがちなかで、私たちは「核兵器は無くせる」という希望を無くしてはならないと思っております。過去、歴史の中で

不可能だと言われてきた「奴隷解放宣言」、「アパルトヘイトの撤廃」、さらにNGO活動が大きな後押しになって成立した「対人地雷禁止条約」や「クラスター爆弾禁止条約」など、人類は勝ち取って来ました。核兵器廃絶についても、今回のNPT再検討会議では残念な結果に終わりましたが、「核兵器の非人道性」という過去にないアプローチが大きな力を発揮しております。前広島平和文化センター理事長のステイブ・リーパー氏は在任中、米国で一〇〇カ所以上の原爆展を開催し、核兵器廃絶への都市(自治体)レベルのネットワークである平和首長会議は、現在、世界一六〇カ国・地域六三七四都市(二〇一四年一月現在)へと一気にひろがり、加盟都市の人口比で見ると全世界人口七分の一(二〇億人)に達しました。

一つ、平和についての言葉を皆さんに紹介したいと思います。アメリカの平和活動家でA・J・マステイ(Abraham Johannes Mustie)が信条とした言葉で、「平和への道などない。平和は道そのものだ。」と。マステイは、「平和」を名詞としてではなく、「動詞」としてみていました。つまり、平和とは、どこかにゴールがあるのではなく、私たちの人生の今、現在そのものに、秘められているということです。

今日、芸術と平和についてお話しさせて頂いてきましたが、

副題にもあります「芸術平和学的思考によるコミュニケーション」とは、まさに、アーティストだけが持った特権ではなく、コミュニケーションの語源にあるように平和的価値を「分かち合う」ことこそ、芸術平和学的思考であると思います。言葉、言語は、人間と人間を心で結ぶ、人類が生み出した最高の芸術です。東洋の仏教の歴史の中で、インドのサンスクリット語の仏典を名漢訳した鳩摩羅什という人物がいますが、皆さんがそれぞれの立場で、現代の鳩摩羅什として、言葉で世界をつなぐ平和の礎となっていられることを願いながら、今日のお話しを終わりにさせて頂きます。



会場の様子